

胃腸の話

急性胃炎は種々の要因により生じる胃粘膜の急性の炎症性変化である。症状は突発する上腹部痛、悪心、嘔吐などで重症になると吐下血を伴うこともある。内視鏡検査で胃粘膜の発赤、浮腫、びらんなどが認められる。治療は誘因を除去し自覚症状の改善をはかり症状に合わせて薬物療法が行なわれる。

慢性胃炎は胃粘膜の炎症が長期にわたって持続する状態で病因として感染症、薬剤性などがあげられる。ヘリコバクター・ピロリは幼少期に感染し、この炎症状態の持続により慢性萎縮性胃炎へと進展する。実臨床では上腹部痛などの消化器症状から診断される症候性胃炎、上部消化管内視鏡検査などより診断される形態学的胃炎、および組織学的炎症を意味する組織学的胃炎が混同して用いられている。一般には内視鏡的胃炎分類あるいは病理組織学的胃炎分類が用いられてきた。主に内視鏡所見により分類され、表層性胃炎、びらん性胃炎、萎縮性胃炎などである。症状は心窩部痛、胃もたれ、腹部膨満感などである。上部消化管内視鏡検査で胃粘膜の発赤、びらん、萎縮などがみられる。治療は症状がある場合は酸分泌抑制薬などが用いられる。ヘリコバクター・ピロリ感染胃炎の場合は除菌が行われる。

消化性潰瘍（胃潰瘍、十二指腸潰瘍）は胃十二指腸粘膜の粘膜下層以下の組織欠損で、ヘリコバクター・ピロリ感染と低用量アスピリンを含む非ステロイド抗炎症薬（NSAIDs）の服用が2大要因となっている。症状は心窩部痛、嘔気などで吐血、黒色便がみられることもある。診断のために上部消化管内視鏡検査がおこなわれ病期を判定し良性、悪性の質的診断がおこなわれる。治療は出血性潰瘍では内視鏡的止血治療が行われる。ヘリコバクター・ピロリ陽性の場合には除菌治療が行われる。除菌治療により再発はみられなくなったがNSAIDsの内服により再発することがある。NSAIDs服用の場合は薬剤の中止が第一選択であるが中止できない場合にはプロトンポンプ阻害薬などが投与される。NSAIDs服用がなくヘリコバクター・ピロリ陰性の場合には非除菌潰瘍治療が行われる。穿孔がみられる場合は外科治療が行われる。

逆流性食道炎、下痢、急性腸炎、便秘についても触れた。

（中島医院 中島俊吾）